

2017年11月12日(日)

## 説教:「主の僕」

聖書:イザヤ書42:1~9

イザヤ書 42 章からは大帝国として力を振るっていたバビロニアが陰りを見せ、代わってペルシアが頭角を現す。キュロス王率いるペルシアは、バビロニアを滅ぼす。王はユダの民を解放し、祖国への帰還を促した。民はキュロス王こそメシア、救世主ではないのか！我々を解放し、自由の身にしてくれた、このキュロス王こそメシアだと多くの民は思った。

イザヤの言う「主の僕」とは誰のことを指しているのか？ ユダの民は、力強い御腕をもって滅ぼし、バビロニアよりも勝る軍事力を持って敵を圧倒したキュロス王こそ「主の僕」であると確信したことであろう。しかし、後に分かったことは、…その解放は、政治的戦略であった。ペルシア帝国にとって最大の恐怖はエジプト王国である。ユダ民族を解放しパレスチナ地方に帰還するように命じたのは、ペルシアとエジプトの間にユダ国を再建させることにより、ペルシアの盾にする政治的戦略であったのだ。

では聖書の言う「主の僕」とは誰のことを指しているのか？ イザヤ書 42 章 1 節は、福音書の全てに出て来る言葉。イエスがヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられると、天が裂けて“霊”が鳩のように降りて来て「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた(マルコ 1:11)とある。この「主の僕」は、イエス御自身を指していることが分かる。このことは、決して力強い御腕をもって敵を滅ぼし、強大な軍事力を持って敵を圧倒する者が、「主の僕」ではないということ。時に旧約聖書の箇所から、戦争もまた「聖戦」という形を持って、戦争が肯定されることがあるが、人間が起こす戦争に正しい戦争はない。イエス・キリストを通して見る時にその答えが示されている。

イエスは、「傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／…捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出す」お方である。

最後にもう一度、この「主の僕」とは誰のこと指しているのか？

この「主の僕」とは、一人の人を指しているようであり、複数の人を指しているようでもある。マタイ福音書 25 章(35~40 節)に一つの譬えがある。《…はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。》

私たちも、イエスにならって「主の僕」にさせて頂くことはある。一人ひとりが、それぞれに与えられた働きを担い、「主の僕」にさせて頂けるのだ。(神谷)